人の生と死（二）
―― 入山ゆき子さんのこと

主よ、怒ってわたしを責めないでください
憤って懲らしめないでください
主よ、憐れんでください
　わたしは嘆き悲しんでいます。
主よ、癒してください、わたしの骨は恐れ
わたしの魂は恐れおののいています。
主よ、いつまでなのでしょう。

主よ、立ち帰り
　わたしの魂を助け出してください。
あなたの慈しみにふさわしく
　わたしを救ってください。
死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず
陰府に入れば

　だれもあなたに感謝をささげません。

わたしは嘆き疲れました。
夜ごとに涙は床に溢れ、寝床は漂うほどです。
苦悩にわたしの目は衰えて行き
わたしを苦しめる者のゆえに
　老いてしまいました。

悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。
主はわたしの泣く声を聞き
主はわたしの嘆きを聞き
主はわたしの祈りを受け入れてくださる。
敵は皆、恥に落とされて恐れおののき
たちまち退いて、恥に落とされる。（詩編六、新共同訳）

私どもにとってもっとも古い信仰の友人のひとり入山ゆき子さんが、去る八月十三日天に召された。友人といっても、入山さんは私より一まわり上の同じウサギ年、九月二十日の誕生日で満七十三歳になろうというところであった。人生のことでも、信仰の上でも尊敬すべき先輩であった。

一　その人間

入山さんと言えば、何よりも正義感の強い人だったということに異論のある人はいないだろう。曲ったことのきらいな、何事にも筋を通さなければやまない人だった。

それが入山さんを男まさりの勝気な、強気の人にした。とにかく足に障害を持ちながら、女手一つで開拓をし、土地を手放すこともなく農業をつづけてきたその一貫した姿勢は「神の正義」への信仰の然らしめたものとはいえ、見事なものだった。

第一に、入山さんと言えば、文字通りの「勉強の人」であった。入山さんにかかると、テレビのドラマ一つにしても勉強の種で、どんなことからでも勉強しなければいられない人だった。だから入山さんは見かけは平凡な田舎のおばさんだが、一度口を開けば話題は広く日常茶飯のことから世界のことに及び、その知識、その見識、その洞察にみな感じ入った。

三番目に、入山さんは曲ったことはきらいだったが、曲ったことをせざるを得ない人に対して驚くほど寛容だった。どこまでも筋を通そうとする一方、妥協の上手な、世間の常識をよく知る人だった。それが彼女を女丈夫にしていたのである。

入山さんが亡くなったのは一九八八年八月十三日の夜である。その日私共夫婦は、たまたま一家で桜畑に滞在中であった中林憲一君から入山さんの容態が悪いという電話を受けて、入山さんが入院中の石和リハビリテーション病院に急行した。その夜に亡くなるとは誰も思っていなかっただろうに、全く偶然のように、九州

出張から休暇で一事帰宅中だった次男薫君、亡き長男義英君の妻好子さん、薫君の妻さとしさんをはじめ、それぞれの子供たち（すなわち入山さんの孫たち）六人、最後まで献身的な看護をしてくれた好子さんの弟の那須豊明さん、兄の輝美さん、開拓時代からの一番古い仲間のひとり瀬戸さんとその家族五人、友人の中林君一家四人に私どもと、実に二十人以上が狭い病室に集った。そのひとりひとりが見守る中で午後九時二十分、入山さんは最後の息をひきとったのである。皆で彼女特愛の讃美歌「山べにむかいて　われ目をあぐ」（三〇一番）を歌い、祈って、その霊を神にゆだねた。

その時、私の心をよぎった思いは「族長の死」ということであった。それでなくとも小柄の、そして今や骨と皮だけになった小さな小さな入山さんの死は、実に大きな大きな一家一族の長の荘厳な死であった。

二　その生涯

入山さんの生涯は苦難の生涯であった。入山さんはまことに苦難を負った人であった。

その苦難の第一は、貧と言うべきであろう。もちろん先の戦争を経験した人は多かれ少なかれ貧の苦しみを知っているが、入山さんは開拓に入って間もなく橋から転落して足の骨を折り、つづいてご主人の豊吉さんを病で失い、幼い二人の子供を抱えて開拓に従事した。その貧しさはまた格別のものであったに違いない。

しかし貧を知る者は豊かさを知る。八ヶ岳おろしの吹きすさぶどんな寒い夜でも、熱い位の切炬燵に両足を入れて、自家製の梅酒を一口ふくみ、丹精した野菜の漬物と精進揚げで白いご飯を食べれば、そこは実に王侯の食卓になるのであった。入山さんは真底そう信じ、生涯桜畑の生活を楽しんだ。

第二は病苦であろう。入山さんは足が不自由とはいえ、農民らしく頑健そのものに見えた。しかし酷使がわざわいしたのであろうか、ここ数年は関節リウマチに苦しんだ。そしてついに今年四月に治療のため巨摩共立病院に入院した。病状は急速に悪化し、石和リハビリテーション病院に転院したころ（七月初旬）一時小康を得たが、入院してからちょうど四ヵ月で、少なくとも私どものようにその間ほんのわずかしか会うことができなかったものにとっては、実に唐突に、あっけなく逝ってしまった。

そしてその間痛みに苦しみぬいたようである。その最後の日、私どもにわかる彼女のことばはただ「痛い、痛い」であり、あとはただ「アーン、アーン」という泣き声であった。そのさまは、まさにイスラエルの詩人の次のことばのようであった。「わたしは嘆き疲れました。夜ごとに涙は床に溢れ、寝床は漂うほどです。苦悩にわたしの目は衰えて行き、わたしを苦しめる者のゆえに老いてしまいました」。

第三の、そして最大の苦難は息子に先立たれたことである。長男義英君が十年前にガンで急逝したとき、入山さんは「こんなことが、どうして・・・」と絶句した。その当時私は次のように書いた。

「・・・あいかわらずに忙しく働きながらも、入山さんにやっと人並みの幸福が訪れたかに見えた。その矢先のこの突然の不幸である。「こんなことが・・・」と、すべてを知り給う方に必死に抗議したとて、だれがそれを責められようか。神様、なぜ、この十分に苦難をなめ、それに耐え、あなたに対する信仰を守り通して着たこの忠実な僕を、なぜこの上むち打たれるのですか」。（「テコア通信」第九三号、一九七八年十一日）

私どもには到底計り知れない深い苦悩から少しずつ立ち直って、入山さんは「あと十年何とか元気に働いて、義英のために孫たちの面倒をみよう」と決心したのであった。不規則な勤務もある看護婦として働いて家計を支える好子さんのためにも、それはどうしても必要なことであった。そしてちょうど十年、入山さんは立派に

その決心をつらぬいた。三人の孫たちは、それぞれ高校一年、中学二年、小学六年生となり、もうおばあさんの世話がなくても立派にお母さんを助け、自分たちで生活していけるようになった。それは入山さんの入院中すでに実証された。入山さんは、その点ではきっと「安気して」（「安心して」の入山さんの用語）亡くなったにちがいない。

しかし、こんどは私が「どうして・・・」と絶句せざるを得なかった。この十年、多くの心霊上の疑惑と戦いながら一所懸命生きてきて、やっと責任を果し終えた入山さんを待っていたものは、恐るべき病気の苦痛であった。リウマチから、あんなに簡単に、あんなに短期間に、まるで筋無力症のように体ぜんたいの力がぬけてしまうものであろうか。ほかどのような原因があったにせよ、いまどき入院中に、あんなにひどい、見るにたえないような褥瘡になるものだろうか。入山さんの病気には正直なところ、素人目にも不可解に思えることが多かった。

世間並みに言えば、これから孫たちに囲まれて、「安気に」読みたい本を読み、好きにまかせて畑仕事をし、世界中で一番いい所だという桜畑の景色を賞でながら、充実した楽しい晩年を送ろうというこのときに、なぜあんなにまで苦しんで死ななければならなかったのか。

しかも、率直に言うが、私のように病床に三回しか見舞わなかった者でも、病床の入山さんは元気なときの入山さんとはあまりにも違っていた。七月半ば小康を得た一と時を除くと（私は幸いちょうどそのころ彼女に会うことができた）、入山さんはほとんど生きる気力を失っていたように見える。これは見舞いに行った人がほぼ一様に言っていることである。ある親しい人には「（いまわざわざ来なくても）死に顔を見に来てくれればよかったのに」とさえ言ったという。このようなことばを聞くのは、彼女の信仰の友人すべてにとって、まこ

とに悲しいことであった。

好子さんの弟豊明さんがたまたま仕事の都合がついて、入山さんの看護役となり、とうとう死までの四ヵ月、昼夜付き添って、女性も真似できないほどの至れり尽くせりの看病をしてくれたことは、入山さんにとって本当に幸いなことであった。その豊明さんに対してさえ、入山さんはかなり我がままを言ったらしい。

病人を見舞う人は、ほかに言う言葉がないので、「頑張って下さい」と言う。要するに、「病気に負けないで、快くなり、元気になって下さい」ということだ。入山さんのすぐ上の姉の方が死の前日見舞われた折も、同様の意味の言葉をかけると、入山さんは「しつこいな、もうそんなこと言わないでくれ」と言い、そのあと二度「悲しい」と呟いたという。入山さんにはもう「頑張る」意志はなかった。「楽にしてほしい」が願いであった。

その「楽にしてほしい」は、しかし、ただ痛みからだけのものであったのだろうか。私にはどうもそうは思えない。

最後の数時間の間、私も何度か入山さんに呼びかけた。詩篇二十三篇を読んでもあげた。意識はさいごまであったと思われるので、私であることもわかったのではないかと思うのだが、とにかく入山さんのほうからの言葉は声だけで意味は全くわからなかった。ただ何度か私の呼びかけに応えるかのように、じっと大きな眼で私を見つめた入山さんの顔を私は忘れることができない。私が勝手に推測するのに、入山さんには何か訴えたいことがあったのだと思う。それにはもちろん体の痛みも、残していく家族のことも、その他もろもろあっただろう。しかし、入山さんが本当に訴えたかったことは、決してそのようなことではなく、もっと深い心霊上の訴え、神に対する訴えであったのではないか。

それは義英君の死以来この十年、入山さんが一日として忘れることなく抱きつづけた「なぜ」、「その故は神知り給う」その「なぜ」であったのではないか。再びイスラエルの詩人のことばを借りれば、「主よ、怒ってわたしを責めないでください。憤って懲らしめないでください。主よ、憐れんでください、わたしは嘆き悲しんでいます。主よ、癒やしてください。私の骨は恐れ、わたしの魂はおそれおののいています。主よ、いつまでなのでしょう」という魂の注ぎ出す訴えだったのではないか。

しかし、人は誰もそれをわかってくれない。そして非情にも、ただ「頑張れ」と言う。その焦立ちが、病床の入山さんを、ふだんはしっかり者で、ものわかりのいい、誰に対しても頼りになる「先生」であった入山さんを、あのように変えてしまったのだと、私には思えるのである。そう思うと、入山さんに対して惻々たる同情の念が沸き起ってくるのを覚える。そして、入山さんに対して本当に申しわけなかったと思うのである。

いったい、この焦立ちがあって、平静でありうる人がいるだろうか。入山さんは十年間毎日この「なぜ」を独り問いつづけた。そして死の前の激しい霊の戦いの中で、もはや人の姿など見えなかったのにちがいない。

入山さんの生涯は苦難の生涯であったというのは、この意味においてである。入山さんは苦難を負った人というより、むしろ「苦難の人」であったのである。そして言うまでもなく、人は喜びや楽しみは多くの場合他と頒ちあうことできるが、苦しみや悲しみは、共に軛を負ってくださる方を除いては、ただ独りでじっとこれに耐えなければならないのである。

ここで一言蛇足を加えることをお許しいただきたい。

この頃はクリスチャンの中にも、私が入山さんは苦難の人だったと言うと、入山さんが不幸な生涯を送った人だと誤解する人がいる。とんでもない誤解である。そもそも「苦難」と「不幸」とは全く別のものである。

苦難は神の与える恩恵である。苦難の人は、それゆえ、特別に神に選ばれた人である。苦難の人は、その苦難のゆえに自分の生涯を祝福されたものと信じて感謝するのである。イエスはいわれた、「今泣いている人々は、幸いである」と。（ルカ六・二一）

入山家を訪れた人は、その家庭がいかに開放的で、笑い声の絶えない、楽しい家庭であるかを感じたにちがいない。それは家長の入山さんが、苦難をも感謝する信仰に生きていたからである。義英君の死後も、入山さんと好子さんという、この嫁と姑は、何がなくとも、神への讃美と、主イエス・キリストへの信仰と、すべてのこと祈りをもってするという家憲において、固く結ばれた信仰の友であった。入山さんの生涯は世間的にみれば不幸というべきことも多々あったが、この家庭一つをとってみても、また良い息子たちに恵まれたこと、苦労した土地を愛し得たこと、信仰の有無を問わず多くの人と交わり、その敬愛をかち得たことなど、まことに幸福な生涯であったと言うべきであろう。

入山さん自身は足がわるいこともあって、めったに外出しなかったが、入山さんのところにはよく人が立寄り、集まって、いろいろ話をしていった。私どももそのひとりであった。こんど八岳山麓桜畑を訪ねても、もはや私どもを迎えてくれるその人はいない。限りなく寂しい。しかし、入山家は好子さん、その長男実君へと、入山さんの精神を受継いで、主に在る良い家庭としてつづいていくことであろう。そして入山さんが私どもに頒ってくれた入山の家庭は、これからも今までと変わりなく私どもの田舎でありつづけるだろう。

三　その信仰

七月半ばに見舞ったとき、私は入山さんに「入山さんのおかげであんないい所を与えられて（入山さんの畑の一隅に私どもの小さな家がある）、感謝しているよ。有難う」と言ったところ、彼女は「私のおかげでなくて、みんなイエス様のおかげだよ」と答えた。

入山さんの信仰を一と言で言えば、「主イエスへの一途な愛」であろう。若くして志を立て、東京に出て看護婦として働いていたとき出席した教会を通して出会った主イエスに、半世紀を越える年月、ただひたすらな愛をささげて生きた。それはイエス・キリストの十字架によって自分の罪がゆるされたという心からの感謝からわき起こる愛であった。価高きナルドの香油をささげた女のそれのように。

一途な信仰は、狭いと言えば、いかにも狭く、堅すぎると言えば、いかにも堅すぎる信仰であった。入山さんのあの強さも、あの弱さも、すべてはここに発していた。しかし半面、入山さんはどんな信仰に対しても寛容で、どういう信仰的立場の人とも分け隔てなく交わった。

私は、以前入山さんから信仰談義をまじえた経験談をよく聞いた。一篇の小説になるような実に興味ふかい話しばかりだった。私の方からは、入山さんのほとんどひとりの信仰生活を考えて、山本泰次郎先生の『聖書講義』と、飯島正久先生の『牧歌』という二つの聖書・伝道雑誌を紹介しただけであった。もっとも私の個人通信『テコア通信』は休刊まで送りつづけたから、これは読んでくれて、時折、感想を言ってくれた。

しかし特にこの十年間は、あまり信仰の話はしたことはない。お互の信頼がそれだけ深まったからであろうか。入山さんと私は信仰の向きも、その質も、そして関心の領域もかなり異なっていたと思うが、互いに互いの信仰を確かめるようなことをする必要もなかった。ただ時折、信仰の描く軌跡によって知りうる互いの信仰の一致を喜び、その不一致のついては真剣に議論しあったりすることがあっただけである。今となっては、な

つかしい感謝すべき思い出である。

「ヘブライ人への手紙」の著者は言う。「アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています」と。（一一・四）では入山さんは、信仰によって何を語っているか。

私は元気なときの入山さのあの毅然とした信仰者らしい態度――もの事の公平な理解、その適確な判断、その厳しい批判、しかも大ようで、広やかで、こまやかな気配り、など――を立派だと思う。すべてを神とキリストに帰する謙虚な信仰を、その生活のすべてをもって告白してやまなかった入山さんを尊敬する。そして、服が似合うなどとほめられると、「そうけっ」と言って、いかにも恥ずかしそうに笑った、小娘のように若々しい彼女の含羞の微笑が、とてもなつかしい。

しかし私は、それと共に、あんなに最後まで「痛い、痛い」と泣き、苦しみ、時には恨めしそうな目付きをし、悲しそうな顔をし、訴える眼でじっと私を見つめた、あの悲惨としか言いようのない姿の、しかも「泣くよりはかのことばなく、夜暗くして泣く赤子、光ほしさに泣く赤子」（内村鑑三『求安録』）のようになった入山さんこそ慕わしい。

私が入山さんを、苦難を負ったというより、むしろ「苦難の人」と言ったのはそのことである。入山さんはその苦難のすべてを、すべての愛する人（実に二歳の幼児から、彼女より年長の老人までが、その死の床に居合わせた）の前に、いわば「さらけ出して」死んでいったのである。まさに私どもの主がそうであられたように。それは入山さんのようにしっかりした、出来た、いつも人の模範であったような人にとって、どんなに辛いことであったろう。しかし入山さん選ばれた「苦難の人」として、最後まで、いやその最後に当って、それを私どもみなにしっかり示して、召されていったのである。

それが入山さんが「信仰によってまだ語っていること」である。それは「ヨブ記」の主題である「苦難の意義」であり、「神義論」（悪の存在に関して、神の義しいことを弁証する議論）の深刻な問題である。入山さんはその悲痛な死をもって、このことを語ったのである。

「信仰によって」それを語るという。その信仰は、信仰をもてば幸福になるという、「ハッピーな」信仰ではない。その信仰をもてば揺らぐこともないという（立派な）信仰でもない。その信仰は、神が苦難とともに賜わる主イエス・キリストの信仰であり、苦難を通して神の愛を信ずる歓喜の信仰である。入山さんは、この信仰をもって、いつまでも語りつづけることであろう。

あまりに苦しむので、鎮痛の注射を打ち始めて三本目のとき、入山さんの心臓はこれに耐えることができなかった。望みどおり「楽になった」。ひどい褥瘡と敗血症が直接の死因であった。手も足も血のめぐりがわるく、どす黒かった。しかしほんの一時間後、拭き清められた死体の両手は、黒いシミもうそのように無くなって、不思議なほどきれいな色をしていた。顔も、そこにはもはやあの苦しみのあとかたも見られず、心なしかほほ笑んでいるようでさえあった。その入山さんを見たとき、彼女は最後に、神から「その故は神知り給う」を確かに聞いて、安らかに眠ったのだと、私は信じた。そして感謝した。

三度詩人によれば、その時入山さんは高らかに歌ったのだ。

悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。
主はわたしの泣く声を聞き
主はわたしの嘆きを聞き
主はわたしの祈りを受け入れてくださる。

敵は皆、恥に落とされて恐れおののき
たちまち退いて、恥に落とされる。

この世はなお悪の働く場所である。苦難は避け難い。しかし究極の支配者は悪ではなく神である。人の死はいつもこの重大な事実を示してやまない。ここに人のいのちの重さがあり、人の死の慰めがある。

（一九八八年八月二十五日記）

（所載）『テコア通信』（一九九八年八月十三日、入山義英君二十年、入山ゆき子さん十年記念会のために再録）